

JIA城北地域会からの地域紹介と活動報告

KNIT #5



地域の建築や都市景観の

つながりを見つけて

人やモノ、街や風景、季節の移ろいなど
 様々な事象の中で、大切であると思う
 つながりを見つけ、それをどのようにし
 て活かせば良いのか。

そして、
 そのことで、より豊かな心や心地よい
 街となれるのかを考えてみました。

特集 | つながりを見つけて 3

- ひとと人と街の「つながり」の場—商店街5
- 住民をつなぐまちづくり活動の実践
 「ねりま光が丘地域力活性化プロジェクト」 7
- 「モノ・トキ・ヒトのつながり」
 —空間・時間・コミュニティをつなぐ練馬区北町のまちづくり— 9
- 建築のつながり 11
- 崖線地形に建つ寺社のつながりと軸線 13
- 地域のつながりから「つながりを見つける」 15
- 歴史的建造物群保存地区が選定されるまで 17
- 目白台 尾根状台地が育んだ生活文化 19
- 練馬大根の村は今 [練馬春日町—時の流れの中で] 21
- 古代街道のつながり 23
- 落ち葉に想う、樹々の所有者への感謝の気持ち 25
- 谷戸川がく繫いだもの 27

● 「ひと」 ● 建築やまち ● とし(歴史) ● 自然や地形

城北地域会の活動紹介 29

編集後記 30

つながり

こころとかたちのつながり

あぜ道のつながりは季節によって空が写りこむ水面の輪郭線になったり、彼岸花に彩られた稲穂の額縁にもなります。あるいは昼間の街路樹のつながりが目に映えるまちが、夜には街灯のひかりの連なりによって異なる印象をもたらしたりもします。山々のつらなりや雲のつらなりもありますし、いさり火のつらなり、人が列をなしている行列や軒の連なりなど、ならばかたが直線的なものやうつくしく曲線をなすもの、同じパターンのもものがギザギザに少しずつずれていくものなど、いろいろなつながりかたがあります。

こころとかたちのつながり

母親や家族とのつながりをはじめに、幼稚園や保育園、託児所さらに学校、地域の人々、職場の人々、友人とのつきあいなどいろいろなつながりがあります。記憶のつながりや感情のつながり、対話的なつながりのように自分と人とのつながりもあれば、敬語のつかい方など日

常の作法として積み上げられてきた文化的なつながりもあります。

こころのつながりからすると、太陽とのつながりのような物理的なつながりは変えることができないので、受け入れるしかないように思えます。でも星々のつながりを星座としてとらえているように、物理的関係すらも一連のかたちとしてわたしたちなりにこころの中にしまいこむこともできます。

つながりを見つけて・・・

かたちとして残されたものから、かつてのひとびとのつながりを想起こしたり、あるいは未来への思い込めたこころのつながりについて考えました。それらを「ひと」、「建築やまち」、「とき(歴史)」、「自然や地形」という順に、その項目に強く関係していると思われるさまざまなつながりを記事として並べています。みなさんと一緒に、さらに多くのつながりを見つけてみたいと思います。

深川 良治

ひとと人と街の「つながり」の場—商店街

「良い街」とは何か

良い街とはどんな街ですかと聞かれたら、皆さんは、どんな街を思い浮かべるだろうか。住宅販売のチラシに入ってくる、良い街のうたい文句は、駅への距離、小学校、中学校、役所、公園、大型スーパーなどへの近接性や、「歴史と文化の香る…」とか、緑の多い文教地区…」といった、聞き心地の良い言葉で表現されるのが良い街であろうか。

暮らす知恵が詰まっている街

私と家内が結婚する際に引っ越し先として選

んだ「良い街」は、いきいきとした「商店街」がある街。日本には、こんなに素晴らしい、笑顔で集まれる「場」があることを、忘れていた方が多いと思う。「商店街」には、ここで暮らすさまざまな知恵が詰まっている。こだわりの魚屋さんのレシピ講座はいつも楽しい。豆腐屋さんの味は絶品だし、元PTA会長として、何かと相談に乗っていただいた。二人の子供の出産も、情報通の酒屋の叔母さん一押し、地元の産婦人科。退院の際には、院長、看護師さん達が名残惜しそう

に見送ってくれた。

子供達を育てくれた街

近くに祖父母はいなかったが、子供達は、商店街のおじさん・おばさん達に可愛がられ育てられた。小学校の低学年頃だったと思うが、娘の目覚まし時計が壊れてしまい、時計屋さんへ自分で修理のお願いしてくると。店の外で不安げに見守っていたが、「明日までに直しておくよと、おじさんが言った。」名前とか電話番号を聞かれなかったの? 「何も…」

翌日引き取りに行く際も「一人で行く…」と。修理代も自分の小遣いで払うと小さな財布を持ってお店に入ってしまったのだが…。心配で店の中を覗きこんだが、何やら話をして大事そうに時計を抱えて戻ってきた。お金足りたの? 「一人で偉かったねって。叔父さんがお金はいらないって…」また、家内が子供に買い物頼んで、お金が足りなかった際、「〇〇円足りなかったから次回持ってきてね」のメモ。スーパーやコンビニではこうはいかない。

今でも大切なお付き合いが続いていることは言うまでもない。

街の大切なインフラとしての商店街

これまでの「商店街」はどちらかといえば、主婦層の井戸端会議の場所という性格が強かったかも知れない。しかし、高齢社を読み解きながら、老若男女が集う「つながりの場」としての新たな役割を付加し、再生することが重要ではないだろうか。商店街は、街の大切なインフラである。

人と人、人と街をつなぐ商店街の再構築を

大量消費の申し子のような便利なスーパー、ナショナルチェーンの進出、そして、インターネットで何でも買える時代など、「商店街」にとっては厳しい時代ではある。しかし、あえて、「ハレ」と「ケ」を大切に、face to face、車社会ではない、人が主役な商店街が、人と人、人と街をつなぐ「場」としての役割を担うことが「良い街」を増やしていく手立てではないかと思う。

色川善一



住民をつなぐまちづくり活動の実践「ねりま光が丘地域力活性化プロジェクト」

光が丘団地の概要

私が家族4人で暮らしている光が丘団地は、都営大江戸線光が丘駅周辺にあり、分譲・賃貸115棟からなる住宅団地である。約12,000戸、約27,000人が住んでいる。団地の北側（成増飛行場跡）には、約60haの広さを持つ都立光が丘公園があり、野球場、テニスコート、図書館、体育館などの施設が整備されている。光が丘団地はアメリカ軍家族宿舎だった場所に1981年から住宅の建設が開始され、1983年から入居が始まっている。入居開始後、自治会・管理組合が発生し、自治会・管理組合の連合組織として、1986年に光が丘地区連合協議会（光連協）が発足し自治活動を行っている。

ねりま光が丘地域力活性化プロジェクトの活動

2007年11月には、現在の任意団体「ねりま光が丘地域力活性化プロジェクト」が立ち上がった。住宅団地だけでなく、周辺地域と共にまちを活性化していきたい、と

いう理念のもとに立ち上げ当初からイベントを開催している。

毎年3月下旬には「音楽アート&スポーツ祭典 ねりま光が丘 Cherry Blossom Festa」、12月には「光アート祭典 ねりま光が丘 Hikari pagent festa」(2013年～)、8月には「サマーフェスティバル」(2016年～)と年間3回のイベントを実施している。

「Cherry Blossom Festa」は、花見客で賑わう光が丘公園内に100軒を超える屋台が出店する。会場内に設けられたステ



ージでは、様々な団体の演奏やダンスが2日間途切れることなく発表される。12月の「Hikari pagent festa」では、光が丘公園の一部をイルミネーションで飾り、年末の街の雰囲気盛り上げている。8月の「サマーフェスティバル」は、2016年から実施しているが、特に今年は猛暑のためスタッフ、出演者、出店者ともに熱中症との戦いだった。

活動がメンバーのつながりを生む

これらのイベントは、いずれもねりま光が丘地域活性化プロジェクトの実行委員



会による手作りのイベントなのだが、出店数、参加団体数もかなりの規模があり、特設ステージなどの会場設営、パンフレットやチラシなどの広報活動も本格的だ。メンバーがそれぞれの得意分野のスキルを生かし、イベントが運営されている。当日のイベントスタッフはボランティアも含めて50～60人程度が協力している。実行委員会メンバーの友人や地元の高校に声をかけて集まった人たちが、世代を超えてつながっている。

イベントの実行委員会は、1年前から光が丘公園のスケジュールを押さえる。1つのイベントが終わると、すぐに次のイベントの出店者、ステージ参加団体と連絡を取り始める。屋台の業者から出店料をいただき、公園の賃借料や特設ステージの設営、広報の費用に充てている。イベントの2か月前には業者との打ち合わせ、出演者説明会などを行い、ステージ設営や機材の業者とも調整を重ね、当日2日間のステ



ジのプログラムを組み立てている。季節ごとにイベントが動いていることで、活動が切れ目なく続いている。

活動の理念と継続の原動力

ねりま光が丘地域活性化プロジェクトのイベントは、地元のバンドや子ども達のダンスクラブにとっては、日ごろの成果を発表できるステージとなっており、イベントを目指して練習に励んでいるクラブもある。そういった地域とのつながりは、活動を継続していく力になっている。

また、外部の業者に声をかけて出店を依頼しているが、将来的には光が丘を中心とした練馬区内の商店の屋台のみにすることを理想としている。イベントに訪れた人が

地元のクラブ活動や美味しい店を知り、足を運ぶきっかけを作ること、地域全体の活性化につなげたい、という思いが、毎年の活動を前進させる原動力となっている。

地域のまちづくり活動を継続していくには、人、場所、資金、時間、知恵…色々なものが要る。今年度には、「ねりま光が丘地域力活性化プロジェクト」はNPO化する予定である。NPO化することにより、社会的な信用を担保し、行政や民間企業との交渉・連携が対等にできることを期待している。法人化することで、さらに担い手の輪がつながり、活動が継続していくことを願っている。

「モノ・トキ・ヒトのつながり」 —空間・時間・コミュニティをつなぐ練馬区北町のまちづくり—

練馬区北町の「下練馬宿」まちづくり

江戸時代、旧川越街道沿い「下練馬宿」で栄えた現住居表示「練馬区北町」で、今「つながり」がキーワードともいえるまちづくりが進んでいます。下練馬宿は現在の練馬区域内で唯一の宿場町で江戸当時の建物は残っていませんが、この宿場町をベースに長年続く旧街道沿いの商店街が今も栄え、大正期頃から昭和、平成にかけての各時代の建物が残っており活力ある商店

街、街並みを形成しています。

様々な関係者のつながり

ハードの街並みの魅力もさることながらソフトのコミュニティ形成にも注目すべきものがあります。3つの商店街や北町旧跡研究会などが中心となり旧川越街道沿い下練馬宿の魅力を再発見し、まちづくり・商店街づくりを進めています。練馬区商工観光課や練馬みどりのまちづくりセンターなどの支援も受けながら、昔の面影を上手

に取り入れ、立札看板サインや建物外壁に工夫も見られます。行政もいくつかの地区計画、公園整備などで周辺の街づくりを進めており、3つの商店街も協力してイベントを仕掛けるなど、官民それぞれの立場の人たちが協力してつながります。新しいマンションのファサードには「下練馬宿のマップ」が街から見やすく設置され、公園や観音堂などで塀の意匠には「海鼠壁」も取入れられています。

無理のないモノ・トキ・ヒトのつながり

このつながりで感じるのは地域の歴史をツールにしながら各時代のものを自然に取り入れ、それらが無理なく一体となった街並みやコミュニティを形成していることです。近年マンション建設や時間貸駐車場などもあり街は動いていますが、それらも含めて緩やかに時をつなぐ街並み風景となっていると思われます。

北町は、皆に愛されるモノ（建物・街並）、トキ（歴史）、ヒト（コミュニティ）のつながりを感じる価値あるまちです。地域の歴史を継承していること、さらにそれらが時代とともに移り変わっていくことがこの地域の活力や魅力につながっています。

様々なつながりがまちづくりの端緒になる

11月半ば、「練馬大根献上絵巻再現劇」などで盛り上がる「下練馬宿まつり」を北町に観てきました。その賑わいの中で、つながりの大切さを改めて感じ、まちづくりの端緒になることを示唆されました。

久間 常生



マンションの一階に設えられた下練馬宿マップ



高札型の
まちの解説板



観音堂の海鼠壁と石仏



練馬区による
北町上宿公園



練馬大根献上絵巻が
再現される下練馬宿まつり



大正時代の下練馬宿配置図 練馬区史付録「川越街道変遷図(下練馬宿)」より

建築のつながり

かつての現地調査で

35年ほど前の学生の頃、各地の建物の調査に駆り出されたことがある。それは二子玉川を渡った二子溝口から二子新地にかけての大山街道に面したまちなみ調査、東京ディズニーランドが開業する直前の浦安の漁師町のアンケート調査、それに夏休みの大半を過ごした岡山県牛窓町の建物群の実測調査である。

大山街道では岡本太郎や浜田庄司の実家などがありおぼろげながらもかつてのまちなみの名残があったし、浦安では大家族と一緒にいる漁師さんから挨拶がなっていないと頭ごなしに芝居がかった、かなりいい調子で怒られた経験がある。その中でも一番思い出深いのは牛窓町で、かつて海上交易の拠点として栄えていた港町には車社会の影響を受けることもなく、ほぼそのま

まの料亭や遊郭、船大工の作業所や漁師の家、大小の商家の家などさまざまな民家が残っていた。それらは郷里とは異なるいろいろなまちなみとひとびとの生活があることを知った貴重な体験だった。

民家のつながり

まだ大正の頃にはあまり広く使われることがなかった「民家」という言葉を頼りに日本における建築の統一場をはじめて切り開

いて見せたのは今和次郎であろう。彼が34歳のときに執筆し1922年（大正11年）に出版した「日本の民家」である。そこでは農家や町家、下級武家住宅などを「民家」として扱い、統辞論的な体系として、村から町までのつながりや、その当時の郊外の生成過程を示している。さらに地理学や民俗学を動員してたとえば「水田の村と畠の村の面的な広がりの違い」を示したり、東京近郊の「台地と低地の農家屋敷の景観の違い」を読み解いている。それらのつながりを「経糸」とした場合の「横糸」となる範疇的な建物形式の実際の採取例は多岐にわたっているが、たとえば寒地から熱地へ変

化する木造家屋を類型化している。

ところがこの本の出版の翌年に関東大震災が起こり、今和次郎は柳田國男の民俗学とは異なる「考現学」を開始する。社会現象の特徴的なこと、特異点を収集することに収斂しない無作為サンプリングが真骨頂の考現学の一部は「路上観察学会」へ継承されつながっている。民家採集や考現学はどちらも多様な生きられた現象を記録しそのつながりを探っている。

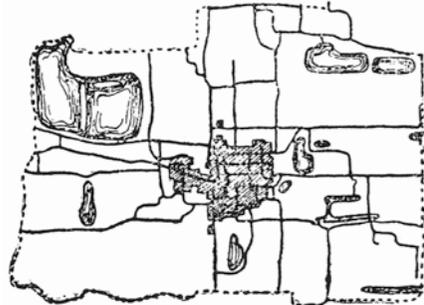
建築のつながりが織り成す「織物＝テキスト」

民家採集のような過去と、考現学のような現在が混ざり合った「織物＝テキスト」の一つとして都市や景観・まちなみを捉え

ようとする見方がありうる。かつて調査に関わった民家群それ自体も、今和次郎のそれまたしかに生きられた現象としての「織物＝テキスト」とみなせるだろう。今和次郎が見ようとしたのは支配的な単一の美学、特徴的な形式ではなく一連のつながりとしての生の猥雑で多様なあらわれとしての徴候、関東大震災直後の人とモノとの初原的な関係を示すバラックの刹那的にしか成立しない美学だろう。とすれば、わたしたちの役割は、将来の今和次郎が読み解く「織物＝テキスト」の一部としてこの時代の生の多様性のあらわれをかたちに残していくことではないだろうか。

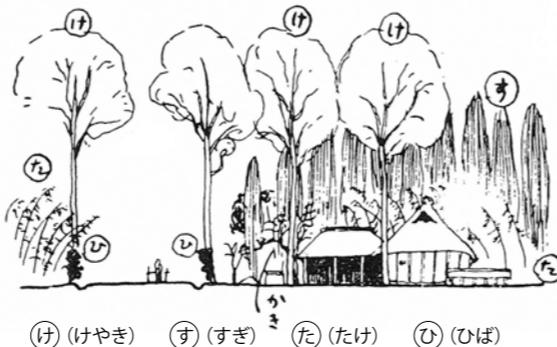
深川 良治

水田の村
大阪郊外の村で集村としての特徴をもっているもの



畠の村
東京郊外の武蔵野の村の一部で散村としてのよい例

東京近郊農家の屋敷 豊多摩郡

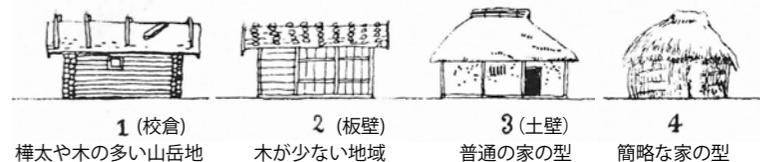


東京近郊農家の屋敷 南葛飾郡



寒地から熱地への木造家屋の型

(イラストはすべて今和次郎著「日本の民家」岩波文庫より)



崖線地形に建つ寺社のつながりと軸線

板橋の崖線地形と赤塚地区

板橋区は武蔵野台地の北東側に位置し、標高の高い川越街道付近と高島平地区との高低差は約 30 mあり東西方向に崖線が区内を貫いています。崖線は複雑に入り組んでいて、東から高台部分には名前が付いており中台、西台、徳丸となっています。今回で紹介する赤塚地区は崖線の西側に位置



赤塚城址



赤塚地区地図 (昭和 12 年)

しており、谷筋がとても複雑に入り組んでいます。

高台に建つ寺社や城

赤塚の高台西側、崖線の先端となる位置に「赤塚城址」があります。この赤塚城は室町時代の 1456 年に千葉市川より赤塚に移った千葉自胤の居城であり、現在は城はありませんが高島平方向に見晴らしの良い広場となっています。その東側に谷筋を挟んで位置する寺社が松月院大堂、松月院、赤塚諏訪神社となります。これらの寺社はすべて高台の標高 30 m 付近に建てられています。私は赤塚地区に在住しており、こ



赤塚諏訪神社

の付近を散策しているときにあることに気が付きました。それは松月院の参道の方が松月院大堂の方を向いていて、その反対側にある赤塚諏訪神社の方角にも同じく関係性があるのではないかとということでした。そして各寺社の成り立ちについて調べましたので次に解説します。

城と寺社のつながり

3つの寺社のうち、最初に創建されたのは「松月院大堂」です。現在は松月院が管理を行っているため、松月院大堂と呼ばれていますが、かつては大堂と呼ばれており、その創建は古く平安朝初期の 810 年あたりで



松月院



松月院大堂

あったと言われています。室町時代には七堂伽藍を備えた大寺で、現在も同一敷地内に八幡神社が併存しており、神仏分離の影響は階段が別れているところに多少見受けられますが、とても珍しい配置となっています。

次に建てられたのが高台北側の大門地区にある「赤塚諏訪神社」です。創建年は不詳とされていますが、1456 年に赤塚城に移った千葉自胤が信濃国・諏訪神社より分霊し、武運長久を祈願して赤塚城の北東方向の鬼門除けに創建しました。その後は地域の五穀豊穡と子孫繁栄を祈る「田遊び」という神事が受け継がれ、国の重要無形民



松月院大堂鳥瞰図

俗文化財に指定され現在まで続いています。

そして3つのうち最後に出来たのが「松月院」です。正式名は萬吉山宝持寺松月院で、1492年に千葉自胤が寺領を寄進し古寺の宝持寺を改名し創建されました。1494年に亡くなった千葉自胤、千葉一族の菩提寺となっています。その後の 1841 年には崖線下の徳丸が原に於いて高島秋帆が西洋式砲術訓練を行った際の本陣として松月院が使われました。高島平の名称は高島秋帆にちなんで付けられているそうです。松月院から徳丸が原方向をみた江戸時代の風景画を見ていただければ高低差とその広がり

理解できると思います。このように赤塚城と3つの寺社は、崖線地形を上手く利用して配置した千葉自胤から、現在に至るまで大きく変わることなく地域に受け継がれ繋がっています。

3つの寺社の軸線

ご紹介した3つの寺社は図のように1本の軸線で結ぶことが出来ます。現在は松月院と赤塚諏訪神社の間には新大宮バイパスが通っており、歩道橋は有るものの、まっすぐには歩くことが出来ませんが、松月院と赤塚諏訪神社の間には、怪談で有名な乳房榎や赤塚諏訪神社富士塚などが同一線上に有ります。かつ同じ標高にあるので坂の上り下りをせずとも3か所を訪ねることが出来ます。かつては松月院大堂、松月院、赤塚諏訪神社を結ぶ道には人々が通って居ただけなのということが想像されます。ぜひこれらを一度に訪ねてみることをお勧めします。歴史、建築、地形のつながりが発見できると思います。

信原利行

地域のつながりから「つながりを見つける」

マンションライフ

2005年、日本の総人口が減少に転じた。かつてインナーシティ問題が叫ばれた千代田区では、都心への人口回帰により1995年（平成7年）を境に人口増に転じた。人口は6万を超えたが、マンションなどの共同住宅に住む人の割合は89.2%に及び、地域の人のつながり、関わり方も変化した。マンション（フランス語では個人の豪邸のことで、アパートのことではない。）ライフの人に「マンション内でつながろう」「町会に入ろう」と言っても難しい。JIA建築交流部会の勉強会で、前野まさる氏の話を書く機会があった。アパートつくるときには中庭を併設し、子どもを「つながり」の契機にという話があった。

コミュニティ形成施設

以前、JIA城北地域会主催のまち歩きで、豊島区長崎・南長崎地区を歩き、まちにある資産、芳しくない状況なども見て歩く機会を設けた。写真は、メンバーの泉さん設



写真は、メンバーの泉さん設計のアパートメント惣「アパート惣」（南長崎）での集合写真。
2017・8・19（土）西武池袋線東長崎駅改札（15時集合）⇒椎名町駅（17時ころ解散）
JIA 城北主催のまち歩き。まちにある資産、芳しくない状況なども見て歩く。

計の「アパート惣」（南長崎2丁目）での集合写真。中庭により、隣接の共同住宅の空き室はなくなったようだ。近所には共同「井戸」もあり、昔から、長崎の地域では、数軒で井戸を共有していた歴史資産（井戸端会議などかつてのコミュニティー形成施設）も残る。かつて豊島区には、アトリエ村（長崎2丁目）でもそのような形態があったようで、豊島区は、さくらが丘パルテノンあたりのことと連動した話（説明板）の設置でもすべきと感じる。井水のくみ上げも故障のようだが、地域の生活史上の、貴重な遺構の一つではないか。ところで、アパート惣のオーナー（秋元さん）は、この開発形態を大変気に入って、古いアパートを建替えて、すでに2棟あり、現在3棟目を建設中だとか…前野さんの話の実例のように感じている。

新住民の流入

千代田区の将来人口推計では、2055年にピークを迎えその後減少に転じる。15歳

～64歳の生産年齢人口については、2035年をピークにその後減少に転じる。区民の約9割が定住意向を持ち、ほぼすべての年齢層が転入超過だが、一方2014年（平成26年）には約5千人が区外に転出している。いま地方都市が衰退と存亡の危機に直面し、大都市圏においても、低質市街地では家族・コミュニティーの崩壊に伴う社会問題が多発。遠隔郊外地では空き家・空地化による居住地の荒廃も顕在化している。緑の多い都心中心からやや周辺、東京の山手線外周域では、現在不燃化特区の下、建て替えが促進されている。一極集中を避けたい国のコントロール下、やがて訪れる人口減少に向かい、マンション化が促進するとも思えないが、さして老朽でもない戸建てまで、ちまちまとした住宅に建て替わってゆく。当然新住民が地域に増え関わりを持つ。これまでの地域文化とどうかかわり、あるいは新しい波を起こしながら暮らしてゆくのか。このことへの受け皿づ

くりが地域自治体に求められている。

千代田区では

豊島区や府中市のまちづくり協議会では、町会や自治会など地権者が主にまちづくりを進めている。自治体職員も、そのことに何らの不思議も感じていない。千代田区の進みを参考に、マンション住民や、昼間人口とのつながりにも配慮した仕組みづくりが必要だ。千代田コミュニティーラボでは住みこなしブックづくり活動も展開されている。千代田区は特殊だが、東京の傾向をよく示している。まずは顔見知りになり、町の課題や資源など、小さなシェアの積み重ねが大切だ。千代田に起ることは、やがて区部市部にも起こる。つまり、KNIT 区だけでなく、地方都市にとっても、新たなつながりづくりに向けて学ぶところが多いと考えている。

<http://chiyolab.jp/> 亀井天元

歴史的建造物群保存地区が選定されるまで

「彦根市河原町芹町地区」は2016年文化庁により重要伝統的建造物群保存地区として選定された。沿道の伝統的な建物を保存・再生・活用し、一連のつながりあるまち並みを創り出すことになる。ここに至るには、そこに古い建物が建ち並んでいることだけではない。それ以上に、そこに住む人々がまちのつながりを再興しようと、二十年以上にわたり地道な活動を積み重ねてきたことにこそ、評価の本質がある。

花しょうぶ通り（旧上恵比須商店街）

この通りは、江戸時代の地図にも商店の並ぶ地域として記載されている。バブル崩壊後の90年代、若手がリターンしてきたことで新たな活動が始まった。1997年に江戸時代寺子屋だった力石邸を商店街で借り上げ「花しょうぶ館寺子屋力石」を開設し

た。約250年前の建物と言われている。同年、「ふる新しい街」として「花しょうぶ宣言」「人力紙飛行選手権大会」が始まり、滋賀県立大学と町衆でイメージアップ事業として花しょうぶ通りをモチーフに大壁画を描いた。1999年のファサード事業に伴い、「上恵比須商店街」から「花しょうぶ通り」（商店街振興組合）へと組織変更した。花菖蒲は彦根市の花。

ACT・ACT Station

花しょうぶ通りの入り口久左の辻の銀座街角に6階建てビルが7年も閉められたまま放置されていた。1998年6月「シャッターを開けよう!」と提案（柴田）したのも、そこに交わる銀座、登り町グリーン通り、橋本、花しょうぶの4商店街、そして彦根市に新しい息吹を呼び起こそうと考えたからだ。

その初動エネルギーを学生に借り、古ビルにACT Stationが誕生、学生と町衆の連携が始まった。ACTはAction Connect with Townの略。滋賀県大生の自主サークルで、基本理念は「まちづくりと自己実現」である。ライブや多彩なイベントを繰り広げ周辺地域を巻き込んでいった。2003年滋賀県大湖風祭のファッションショーをACTの舞台製作により久左の辻で開催したことで、商店街と学生の距離が近くなった。

勝負市

それまでの花しょうぶ祭りを改め町衆とACTで2000年に勝負市が始まった。現在は市内3大学（滋賀県大、滋賀大、聖泉大）にACTからバトンが渡され、学生約200人が実行委員会に参加している。100グループ以上のモノづくり作家や地域のレストラン、

学生音楽サークルと地元の音楽関係者連携でライブなどを展開、6月初旬の土日1.5~2万人が来場するまでに育った。

LLP ひこね街の駅

2007年花しょうぶ通り商店街振興組合、大学関係者、彦根景観フォーラム、商工会議所、行政の仲間によって発足。4つに増えた「ひこね街の駅」の運営、まちづくりの実践やイベント企画、キャラクター商品のデザイン、商標登録の管理などを担っている。第1の「寺子屋力石」は講座やギャラリー。第2の「戦国丸」は元銭湯で戦国関連グッズの企画販売。第3の「通信舎」は元郵便局で情報発信の場。第4の「治部少丸」は石田三成にちなんだ展示。現在第5ひこね街の駅「仮称未来食堂」を準備中。幾つかの店舗も新たに開業、花しょうぶ通りを訪れる

若者の姿が増えている。

耐震改修工事

2006年「防災・耐震・まちづくりフォーラム」に伴い彦根市が「地域再生計画」を策定、木造伝統構法彦根研究会を開催。彦根には古い町家が多い事もあり、活動拠点「寺子屋力石」を木造伝統構法による耐震改修の実例とする事となった。棟梁の指導を受け1ヶ月100人のボランティア（学生・市民・建築士・市職員）により耐震改修工事を行った。これら一連のプロジェクトは内閣総理大臣賞を受賞。その後、「歴史・景観・まちづくりフォーラム」を開催、彦根の古い写真をデジタル化するなど活動は盛り上がった。ところが、2011年1月2日に寺子屋力石が類焼、荒壁パネルで仕上げた耐震壁が耐火壁となり幸いにも改修部分は残ったものの、奥

座敷は全焼。2階も屋根に火が抜けるほどだった。それでもまちのシンボル再興の為、焼け跡を皆で片付ける一方、募金活動を進め仮補修の中、ギャラリー・カフェ「寺子屋」を開いてきた。

伝えたいこと（町衆力と学生力）

「100の愚痴より10の提案、10の提案より1の実行」をモットーに一つ一つをしっかりと実行し、周りを巻き込む活動と情報発信を続けてきた。町衆力が、学生力を呼び込み、新しいまちの祭り「勝負市」を生み、活力の基礎ができた。そこに重要伝統的建造物群保存地区の指定を受け、景観と構造に国と市の補助を受け「寺子屋力石」も再興された。（竣工20181021）ソフトとハードのまちのつながりは今新たなステージに昇華しようとしている。

🌱 柴田いづみ



人力飛行機選手権大会



花しょうぶ通り壁画



久左の辻ファッションショー



ひこね第1街の駅「寺子屋力石」



結のまちづくり研究所



ひこね第2街の駅「通信舎」



ひこね第3街の駅「戦国丸」



ひこね第4街の駅「治部少丸」



清水家住宅



国指定登録文化財 石橋家住宅



勝負市2016年河原町地区重要伝統的建造物群保存地区

目白台 尾根状台地が育んだ生活文化

目白台は南北に狭く、東西に延びる台地である。とりわけ南は神田川へ下る急峻な斜面で、崖線緑地が多く残されている。目白通りはその背骨をなす平坦な尾根だ。これらが独立した個性を育む条件となった。

江戸切絵図では、雑司ヶ谷の集落と護国寺周辺が描かれている。目白坂の記述もある。江戸城からおよそ5~6km、徒歩1時間は、世界の古い大都市共通の市街地外周境までの距離だ。目白台はその外側に位置する。川沿いに比べ安定した尾根道目白通り(旧清戸道)は、物流の幹線として発展した。護国寺(1681年)参道音羽通りに面した入口目白坂は、一気に尾根に登る急坂だったが、明治20年代に勾配を緩和し道幅を広げた新目白坂がその隣に生まれた。



「目白坂」河野通勢(大正13年)

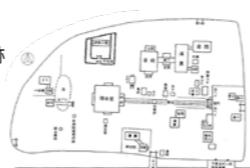
インフラの整備

目白発展のきっかけは、明治18年(1885年)品川線目白駅の開設だ。当初は北部の物産を都心へ運ぶ役割だったが、40年を経て環状線となり、新興中産階級の通勤の手段へと変化した。駅の開通で目白台の中心は西に移り、お屋敷や中産階級の住宅地として発展、人口も増え、大学が加わり文教地区としての環境も整った。これが目白の基本形となる。もう一つは、昭和8年(1933年)開通の千登世橋である。東京ではじめての立体交差で、明治通りと都電をまたいでゆるいアーチを描く鉄橋、石造りの照明柱や鋳鉄の欄干など、風格ある美しい姿は、車社会への移行を示す。目白通りもイチョウの並木が整備され、緑豊かな地域とする景観的特質となっている。

南斜面の大邸宅と周辺への波及

江戸時代、目白台の南斜面中心に一带は大名の下屋敷だった。明治にこの地は当時の元勳たちの屋敷に代わった。その代表

感応寺跡



例が山県有朋の椿山荘で明治11年購入、地名椿山から命名された。隣の蕉雨園は明治30年田中光顕伯爵の御殿づくり大邸宅で、国内有数の規模と質を誇る。周辺は上流階級の住宅地として発展、今も村川邸(明治44年)などが当時の面影を伝えている。学習院の目白移転(明治30年代)とともに当時の院長・近衛篤磨も落合村(下落合2,3丁目)に移り、広大な屋敷を構えた。屋敷の南端に瀟洒な建物群からなる学生寮(現目白クラブ)を建設するなど一帯を整備した。これが周囲に住宅地を広げるきっかけとなり、駅から西へ目白の発展を促し



「明日の目白」目白文化協会(昭和22年)



た。その邸宅も今は跡形なく、旧馬車道のロータリーが樺の大木と共に近衛通りの中央に残されているだけで、その経緯を知る者は少ない。隣接する落合の深い谷あいを含む相馬邸の広大な庭園は、戦後新宿区立おとめ山公園として開放され、地域の資産としてその姿を変えた。

一世紀有余今日までいずれも元のままではない。分割され個人へ、法人や財団へ、あるいは公共財へと姿を変えた。元勳や華族ら西欧を真似た存在基盤虚弱な階級は、百年も経たず迎えた敗戦後の平準化社会で消滅、その結果と言うべきか。所有は変われど、時代を超えて受け継がれるそれら歴史資産の保全が今後の課題となる。

地図にはめ込まれた歴史の痕跡

11代将軍家斉の時代、現在の目白3,4

丁目の地に大伽藍感応寺(1836年)が建立された。そのわずか5年後、家斉死去と共に水野忠邦の天保の改革で廃寺になった。この幻の大寺院の跡地3万坪は、その三角形の外形を今も地図上にとどめ、内側は整った区画となっている。明治大正の戸田子爵邸、昭和初め尾張徳川家が南麻布から東半分に移り、木骨西洋館やレンガ造数棟の研究所を建設した。徳川黎明会館がありし日の姿を留めている。残り半分は今も見る整った住宅地に開発分譲された。

新興中産階級の住宅地へ

目白文化村の名は大正後期、新興中産階級のモダン住宅のイメージと重なる。目白台の最西端、中落合から中井にかけて南斜面に分譲地として開発された。開発者は今の西武鉄道堤康次郎。この住宅開発

は、当時の中産階級の夢に応え、関東大震災後の東京市民の西へ大移動とも呼応した。それ

故に目白駅周辺の住宅地もそのイメージが重なって語られることもあり、ハイカラな山の手住宅地の評価が目白に定着した。

生活文化としての目白

目白台の骨格を創った諸々の出来事は相互に連なり、丘の上に文化的で個性的な住宅地を発展させてきた。それは街の構造や空間要素などハード面の経緯だが、人々の側から見ると、そのまま生活文化の形成史として捉えることができる。地形やインフラ、個々の投資による物的な「地域をつなぐもの」がやがて文化的統合に昇華する、いずれの地でもそれが最強のつながりとなる。地域の様々な計画が長い時間を経て如何に地域の個性や文化へ発展するか、重要な視点とし方法としたい。

🍃 柴田知彦

古代街道のつながり：豊島駅～井上駅までの東海道

中学で初めて読んだ古文：山吹の里での太田道灌が蓑を借りに行った道灌山・説話「七重八重花は咲けども山吹の実の一つだになきぞ悲しき」街道も埋もれて山里になっていた佇まいだったのでしょうか。

梅若伝説（木母寺）：謡曲「隅田川」・街道・渡し場での墨田伝説。在原業平：「名にし負はばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」なぞらえ、葦の茂る湿地帯を行く道であったのか。

昨年飛鳥山博物館を訪ね・中里貝塚・豊島郡衙・千川上水を学びました。そして豊島区にも**池袋東貝塚**があったこと・明治期発掘・120年後に再確認された事を知り・縄文貝塚遺跡：三千年以上続く人々の生活のあかし・城北にも人々の営みが続いていたことに感銘です。北区の中里と西ヶ原・貝塚で代表される縄文人の生活は、一万年も営々と続き、単なるゴミ捨て場ではなく・貝塚は再生を祈る場であった跡・人骨も埋葬されていました。交易があった事「**地域**

のつながりと時代経過」街道の歴史が続くのです。律令国家・奈良・平安から鎌倉・室町・武家の時代まで歴史を読み込んでおくべきと考えました。

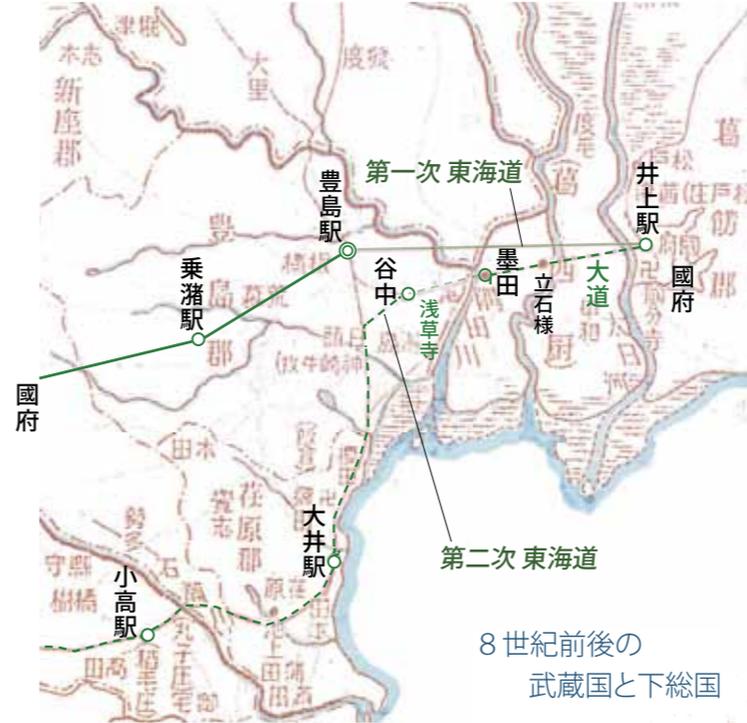
縄文海進があった縄文前期は温暖であり大陸の氷床が解け・海面上がり、荒川・大宮台地に沿い江戸川・利根川流域の最深部は栃木県まで奥東京湾が入り込んでいた。その海岸線に沿って貝塚遺跡があり、流域が今の東京低地です。まちを結ぶ街道は、城北地域にあったのか?という疑問：答は、豊島駅で**駅家**という拠点です。

国というかたちが出来て律令国家となり、当初武蔵国は陸奥への東山道に属していました。東山道武蔵路は上野国・新田駅から南下し、比企・所沢・経由で東山道・武蔵国府に伝え引返し、下野国・足利駅に戻って次の東北の国府に向かいます。武蔵国府と下総への連絡は、乗漕駅～豊島駅（豊島郡衙：御殿前遺跡跡り）同緯度を東に直進する官道が、井上（イカミ）駅（国府台）

に向かっていました。**第一次東海道**・下総への古代官道です。

771年に武蔵国は東山道から東海道に所属替えとなります。海添いの平地・東海道の官道が、陸奥東北への征夷軍・人員の運び・物資調達・輸送の易さが重要だったと思います。東山道武蔵路は廃止され、相模国からの東海道経路で町田・小高駅・大井駅・豊島駅（谷中）→井上駅へ。豊島郡から東に川を渡って行く官道・この新しいルートが**第二次古代東海道**になりました。経路は湿地帯を歩きいくつもの川を渡るわけで渡しや浮橋もあったでしょう。駅として谷中が豊島駅と比定されています。（豊島駅→谷中説・直線路であることは条里制研究者の方々が推測する根拠大いに納得です。）浅草は推古帝の時代からの大寺院・浅草寺参詞の道も往來の便利さもあり街道が続き隅田川の自然堤防も進路である。

鎌倉期は街道・廃れた武蔵路は川をあまり渡らずに上野・下野国（新田・足利）へ繋



8世紀前後の武蔵国と下総国

がるわけで、鎌倉街道として経路は残った。

「隅田川」謡曲・観世元雅の創作・梅若塚伝説：平安期の話が伝わったと思います。悲しい物語であるが当時の**墨田**は賑わいのあった処と察します。

「山吹の里」の伝承・谷中・日暮里あたりの街道も埋もれて山里になっていた佇ま

い・さびれた街道筋を想う。室町中期：古河公方と関東管領との確執、管領・上杉家の重臣であり学問にも優れた武将・太田道灌の行動半径大きく、戦国主権争い・往來も縦横につながり、各所にこの伝承説話があります。この時期太田道灌の江戸城や大石石見守の葛西城が守りです。古代からの宗教施設多い浅草・真土山周辺や足立郡の千住宿からは奥州街道へとつづき、氷川神社（大宮）などを経由してゆく街道筋・社寺への経路のつながりもかなめと思います。第三・四次へと**下総・常陸国**への連絡も変わって行った様です。

閑話休題

この機会に北・豊島・葛飾・足立・墨田区の郷土資料・博物館を訪ねました。葛飾：立石様を訪ね、その場所を横断していた官道の「しるし」古墳石を街道の道標に転用も確認しました。市川市国府台からは江戸川を渡る道を振り返り西方13km先の豊島駅を想像した。小岩には大道下と云う地名あり比定された官道を確認。平安期伴大納言絵巻・応天門の変の時代には、天変地異多く起こり869年貞観地震津波も記録され、940年頃には将門の乱起り、富士山噴火もこの時期頻繁に起こる、西行も「煙たなびく富士」1186年の富士山を謳っている。東京低地では街道も度々洪水に埋もれ、微高地の佇まい遺構、伝承・武家の抗争も郷土資料に物語多く残されています。縦割りの郷土資料は各区の横の繋がりが理解しにくいと感じました。古代の街道など共通テーマ展示されますと**地域のつながり**が深く理解できるだろうと思います。🌿 秋山 信行

落ち葉に想う、樹々の所有者への感謝の気持ち

緑は地域の共有財か

長年お世話になっているS区の住職が「このケヤキを伐ることにしました」と、悲しげに話されました。

よくよく伺えば、毎年の落ち葉の苦情に対しての決断とのこと。幹周りが2mはあり、区の保存樹木にも指定され、高さもかなりなもので、初めは失礼ながら懐疑的に受け止めたものの、すぐに住職の悩みの深さを慮ってしまいました。

『「緑は地域の共有財」とは軽々な意見。緑は限られた人の努力によって守られてい

るのだ。我々はその恩恵にあずかっているに過ぎない。』このことを強く思った住職との時間でした。

森の落ち葉は、堆積し腐葉土となって樹々の栄養となり春の芽吹きへと続く循環系の一部です。ただ、都市の落ち葉は、この循環のシステムに入れません。掃き集めた落ち葉は可燃ゴミとして扱われて不要なものとの意識を生んでいます。それを変えるために落ち葉の堆肥づくりなどの活用方法を広報し、落ち葉は有益なものとの啓発をする自治体もあります。



イチョウ



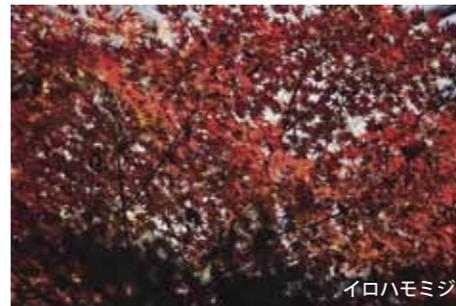
ピンオーク



ハゼノキ



ソメイヨシノ



イロハモミジ



都立城北中央公園

移ろう季節とともに

桐一葉 日当たりながら 落ちにけり

高浜虚子が明治39(1906)年に発表した句で、初秋のゆっくりと落ちる桐の大きな一枚の葉の情景を詠んだものです。陽の当たるところにあった葉が落ちていく様子に、陽から陰へ落ちる葉と季節の移ろいの中で走馬灯のように思いを巡らす情景のように感じます。

また、物事が衰える前兆を表す言葉に「梧桐一葉(ごどういちよう)」という熟語が

あります。梧桐はアオギリのことで、アオギリは他の植物より早く葉を落とすことから秋の訪れを知らせるものとされ、それが転じての意味になります。

植物や季節の変化に自身の人生を重ねることや、その変化を感じる生活に高い価値観を持っているのが日本文化の特色ではないでしょうか。それは、前述の俳句などの文学だけでなく、建築や絵画、陶芸など芸術全般に見られることで、今でも共有される普遍的な価値観であり美意識といっても過言ではないと思います。

街のなかの樹々とつながること

神奈川県真鶴町のまちづくり条例は「美の条例」と呼ばれています。第二条には、町にある自然を賞賛し、その上で今の自然環境や生活環境、歴史的文化環境が形成されたことと明記しています。この環境を保全し創造に貢献することをまちづくりの方向性として、さらに第十条には「美の原則」として、配慮すべき要素を列記しています。25年も前に施行された条例ですが、この夏久し振りに訪ねてみて、この街の人たちが何を大切にしていたのかがよくわかり

ました。彼らは「真鶴らしさ」を大切にしていたのです。

季節の変化と日々の積み重ねの中、その街との関わりに、街の樹々はなくてはならないものです。春の新緑、夏の日射しを遮る茂り、秋の紅葉、冬の木漏れ日などがあるからこそ、生活の中での喜怒哀楽が街の風景の中での記憶となり、思い出になるのではないのでしょうか。そのようなきっかけを作ってくれる樹々に対して、さらにはその所有者に対しては、感謝の気持ちしかありません。

🍃 鈴木和貴

谷戸川が<繋いだ>もの

消えた川

かつて、北区と豊島区の区境を谷戸川、境川、谷田川、藍染川と名を変えながら流れる川がありました。江戸時代の地誌「新編武蔵風土記稿」では、谷戸川という名が出ています。明治からの急速な近代化・市街化の中で、谷戸川はそれまでの役割を失い、昭和の初期には暗渠化されています。

谷戸川の<やと>とは

谷戸川の<やと>とはなんであるか、辞書には東日本の各地に分布し、「谷間・溪谷・やち・やつ・や」などと同義とあります。樋口忠彦は日本人が好んできた景観の原型を盆地・谷・平野の3つに類型化し、両側から山がせまる谷の持つ原初的なイメージを「このような地は谷戸とも呼ばれ、この低

湿地に棲む蛇を神として祀った夜刀神社などがあり、一つのまとまった生産単位を形成していた。」（「日本の景観」）としていますが、大河川を制御できなかった近世以前には谷戸川のような中小河川の谷々を耕地化しています。中世的な耕地の名残を示すとされる<やと・やつ、やとだ・やつだ>と呼



谷戸川が造り出した<やと> (国土地理院地図をカシミールにて出力)

ばれる地名は、谷戸川流域には谷津・宿、谷戸、稲葉谷津、谷田のような小地名を見出せます。これらの旧字地区には、町会や屋号にその名を今に残しています。これらの<やと>を<繋いで>いたのが谷戸川です。



道標にある<やと>
(北区西ヶ原)

地形からムラの風景へ

「明治期の田端風景」を見ますと、横軸には社会・経済軸とも言うべき上野から王子に抜ける尾根道や山辺の道があり、また絵の下方には谷戸川が流れ、縦軸には心的（信仰）軸とも言うべき、川から垂直に鎮守社へ伸びる参道があります。さらに川と尾根道の間には生産・居住空間や共同利用空間が配された空間秩序が感じられます。この風景を形作っていた

のは、ムラの共同体としての<繋がり>と言えます。明治40年代、上駒込に居住した作家の辻潤（1884-1944）は、次のように記しています。「丘の下は一部のヴァレイで、人家も極めて少なく、遙かに王子の飛鳥山を望むこと寺から夕暮にきこえてくる梵鐘の音は実に美し



「明治期の田端風景」(画 伊藤晴雨・原画 大久寺蔵 田端文士村記念館提供)

い響きをそのあたりに伝えました。樹々の間から洩れて来る斜陽、蝸の声、ねぐらにかえる鳥の姿、近くの牧場からきこえてくる山羊の声―私はひとり丘の上に行んで、これらの情趣を心ゆくまで味わったのでした。・・・静かな幸福を自分にもたらししてくれたのです。」（「書齋」）。伊藤晴雨の絵や辻潤の文は、谷戸川の造

り出した地形を美しい風景として形作っていた地域社会の<繋がり>の重要性を今に伝えていきます。

マチの風景

暗渠化された谷戸川沿いには商店街が形成され、マチの風景が形作られました。近年、マチでは、マルシェ、冒険遊び場、まちゼミ、シェア・・・、ゲストハウス、子ども食堂、・・・の家などの単語をしばしば耳にします。公的な空間を身近なものとするための活動であったり、地域の有形無形の資産を活用する経済行為であったり、また社会的課題に対応するための活動であったり、動機とその様子は様々ですが、マチの空間や時間さらにヒトをシェアすることで、マチガリノベーションされつつあると感じられます。これらに共通するキーワードには<繋がり>を見出だすことができるのではないのでしょうか。そして、地域の新たな<繋がり>を創り出しマチの風景を形作ろうとしています。

大沼 敏夫

地域の方との「つながり」を求めて

JIAとは公益社団法人日本建築家協会(The Japan Institute of Architects)の略号で、城北地域会はJIA 関東甲信越支部に属しており、北区、練馬区、板橋区、豊島区の建築設計監理を行う建築家の集まりです。私たちは建築・まちづくりの専門家であり、その専門性を生かしながら地域を理解し、より良い街となるために様々な活動を行っています。



まち歩き

- 2017年 6月「千川上水」(北区編)
- 2017年 8月「街の歴史・木密とみどり」(豊島区編)
- 2017年 11月「農の風景とまちづくりを考える」(練馬区編)
- 2018年 2月「常盤台景観形成重点地区、
「旧川越街道とハッピーロード大山」(板橋区編)
- 2018年 9月「旧前谷津川を歩く」(板橋区編)
- 2018年10月「目白台東端の住宅地」(豊島区編)

セミナー、ショートレクチャー

- 2017年9月「古い民家の分析から環境共生のまちづくりを考える」(講師・深川良治氏)
- 2018年8月「分かる景観から知らなければならぬ景観へ」(講師・小場瀬令二氏)



まち歩き、セミナーは地域をテーマに一般の方々へもホームページなどで募集を行い、ご一緒に参加していただくことで、地域の問題点やまちの資産の再認識について共に考えて持続社会への貢献が出来るよう定期的に活動しています。

空間ワークショップは城北地域エリアの学校やご父兄からの開催要請により、主に小学生を対象に開催している活動で、角材と

大きな輪ゴムを用いて児童達が自由な発想で、中に入れるようなイエ・空間創作を体験できるイベントです。私たちはファシリテーターとして安全面と工法手順などについての助言や発想のお手伝いをするを主にしています。制作時間は2時間ほどですが、子供達は協力、協働することを学び、空間を創造することの楽しさで、かけがえのない時間を体験してくれています。🍃信原 利行



空間ワークショップ

- 2017年 5月豊島区立仰高小学校 空間ワークショップ
- 2018年 11月北区立滝野川第3小学校 空間ワークショップ
- 2018年 12月板橋区立加賀小学校 空間ワークショップ

編集後記

つながりを阻害するような人口減少、地球温暖化、巨大地震とそれによって引き起こされる大規模火災などへの対策と同時に、まちなみや景観を維持・保全し、さらに魅力あるものにしたい。

そういう想いから、ひととまちについていろいろ調べ始めると、思いもよらぬ事実や今まで気づかなかった先人たちの知恵に出会いました。いま眼前に広がるまちなみはそのような先人達の労苦ときらめくアイデアによって練り上げられてきたものです。

でもその現実ただにただ圧倒されてしまっただけで何もしないのではなく、わたしたちも先人たちが行ってきたように、ひととまちに働きかけていきたいとあらためて感じます。なぜならひととまちのつながりは、その成果の上に、ただ乗りしてしまうと次第に劣化して切断されてしまうからです。

城北地域会に集まる建築にかかわる者として、ひととまちとのつながりをさらにより良くしていくために、ひととまちをつなげるさまざまな活動を展開していきたいと強く思います。🍃深川 良治

KNIT#5



発行：JIA城北地域会
公益社団法人日本建築家協会 (JIA)
関東甲信越支部

発行日：2019年1月31日
編集：深川良治 久間 常生 鈴木和貴 信原 利行
レイアウト：要久美子
不許複製・禁無断転載

■お問い合わせホームページ
<http://www.jia-kanto.org/johoku/index.html>



KNIT (ニット) とは北区 (Kita) 練馬区 (Nerima) 板橋区 (Itabashi) 豊島区 (Tosima) の城北4区の頭文字で、「編む・結ぶ」との意味から、地域の人・歴史・文化が織りなす美しいまちを目指した城北地域会の活動を表しています。

